ジョン・デューイ『価値づけの理論』(上)*

岩　田　　浩　訳

John Dewey, *Theory of Valuation* (1)

IWATA Hiroshi

I．その諸問題

価値形成と価値をめぐる議論の現状を懐疑的に見ている人は，ごく些細な事に大騒ぎをしている，否おそらく全く空騒ぎをしていると結論づけるような理由を，そこに見出すであろう。というのも，その議論の現状は，事実に帰せられるべき妥当な理論的解釈に関する意見にかなりの差異がある――それは進歩の健全な兆候であるのかもしれないが――のみならず，価値の理論が適用される事実が何であるかに関しても，また実際にその理論が適用されうる何らかの事実が存在するか否かに関してもかなりの不一致があることを示しているからである。なぜなら，この主題に関する現行の文献をサーベイすると，一方ではいわゆる「諸価値」が単なる感情的形容詞あるいは単なる絶叫にすぎないという極端な信念から，他方では先験的に不可欠な標準化された理性的な諸価値こそ芸術，科学，および道徳がその妥当性を依拠するところの諸原理であるという極端な信念に至るまで，その主題に関するさまざまな諸見解が見られるからである。これら2つの概念の間には，数多くの中間的な諸見解がある。また，同様のサーベイから，「諸価値」という主題に関する議論が観念論と実在論に関する認識論的諸理論によって，また「主観的」と「客観的」に関する形而上学的諸理論によって深く影響されていることが明らかになるであろう。

この種の状況が所与とすれば，前以って妥協しない出発点を見出すことは容易ではない。

平成19年6月18日　原稿受理
大阪産業大学　経営学部

*　翻訳に当たり，*Theory of Valuation* (1939), in Boydston, J. A. (ed.), *John Dewey: The Later Works*, Vol.13, Southern Illinois University Press, 1991, pp.189-251. を底本とした。

というのも，一見適当な出発点と思われるものも，実際には単に何か先行する認識論的ないしは形而上学的諸理論の結論にすぎないかもしれないからである。おそらく，価値づけ理論の問題が最近の議論においてこれほどまで大きくなってきたのはいかにしてなのか，と問うことから始めるのが最も安全であろう。その問題の究明に導くような著しい変化を科学的態度と概念において生み出してきた知性の歴史の中には，何らかの諸要因が存在していたのだろうか。

この脈絡の中で価値づけの問題を観察するとき，直ちに天文学，物理学，化学，等の科学はいかに想像力を拡張しても価値事実や価値概念を表すとみなされうるような表現を含まないという事実にぶち当たる。しかし他方，すべての熟慮された，すべての計画された人間行為は，個人的にも集合的にも，到達すべき目的の価値や値打ちの評価によって，支配されないまでも，影響されるように思われる。実践的事象における良識(good sense)は，一般に相対的諸価値の分別と同一視される。自然科学と人間事象との間のこの対照は，明らかに１つの分岐点となり，遂には根本的な裂け目となる。あらゆる物理的な事柄で当然視されている概念や方法と，人間の諸活動に関して最も重要だと思われる概念や方法とに共通した基盤はないように思われる。自然科学の命題はありのままの諸事実と諸事実間の関係に関わるので，またそのような命題は卓越した科学の立場をもつと認められる主題を構成するので，人間の行為の方向性に関する科学的命題，すなわち**すべき**（*should*）という観念が入り込む何らかの状況に関する科学的命題は可能であるかどうか，そしてもし可能であるなら，その命題および命題が依存する根拠はいかなる種類のものなのか，といった問題が不可避的に生じる。

人間以外の現象に関する科学から価値概念を除去することは，歴史的に見ると，比較的最近のことである。何世紀もの間，およそ16，17世紀まで，自然は，その内に**目的**(*ends*)が存するから，ありのままであると考えられた。目的としての資格においてこそ，目的は完全な，**完璧な**存在を表象した。あらゆる自然変化は，それが目的自身の本性によってそこに向けられるところの目標としてこれらの目的を実現しようと努力しているものと信じられた。古典哲学は，**存在者**（*ens*），**真**（*verum*），**善**（*bonum*）を同一視し，その同一視は自然科学の対象としての自然の構成の表現とみなされた。そのような脈絡においては，価値づけや価値に関する**別個の**問題の要請も余地も全くなかった。なぜなら，現在では価値と名づけられるものは，世界の構造そのものの中に統合的に組み込まれているものとみなされたからである。しかし，目的論的考察が次々に自然科学から除去され，最終的に生理学や生物学の諸科学からも除去されたとき，価値の問題が別個の問題として生起した。

自然から目的の概念とそれを達成するための努力とを排除することで，なぜ価値の概念

が――例えば燃素の概念のように――完全にはなくならなかったのかと問われるならば，その答えは，特に人間事象における価値の概念とその見積りの位置づけについて言われてきたことによって示唆される。人間の行動は，「良い－悪い」，「正しい－不正な」，「賞賛すべき－忌わしい」等の語で表現されるような考慮によって，支配されないまでも影響されるように**思われる**。盲目的に衝動的であるか，あるいは機械的に常軌的であるかの単にいずれかではないあらゆる行為は，価値づけを含むように思われる。かくして，価値づけの問題は，**人間の**諸活動と**人間の**諸関係に関する科学の構成の問題と密接に関係している。価値づけの問題がこの脈絡の中に位置づけられるとき，その問題が焦眉の問題であることが明らかになり始める。価値づけに関して抱かれている多種多様な，対立した諸学説もまた重要性を帯びてくる。例えば，科学的に保証された命題の領域は物理学や化学の命題の領域に尽きると主張する人々は，真正な価値命題や価値判断は何ら存在しない，すなわち実験的証拠によって支持し検証しうる価値についてなら何でも言明する（肯定ないし否定する）といった命題など存在しないと主張するようになるであろう。また，非人格的領域と人格的領域，すなわち存在の２つの別個の領域の１つとしての人間の領域との区別，物理的領域と心的ないし精神的領域との区別を認める他の人々は，物理的な領域から価値の諸カテゴリーを除去することによって，それらのカテゴリーが精神のうちに位置づけられていることが明らかになると主張するであろう。第３の学派は，自然科学の主題が単に部分的（時々単に「現象的」と呼ばれる）であり，それゆえ価値の諸カテゴリーがその中で事実的存在の諸カテゴリーに優先するところのある種の「より高い」型の主題と知識によって補完される必要があるということの証拠として，価値表現が自然科学の中に見出されないという事実を利用する。

今挙げた諸見解は，典型的なものではあるが網羅的なものではない。それらは，議論の課題を示すためというよりも，議論が展開される中心問題，すなわち人間事象の方向性に関する真正なる命題の可能性という問題を――しばしば明白には，その諸見解の源泉を意識することなく――限定するのに役立つようにと掲示されたのである。それが可能だとすれば，価値表現への明確な言及は最小限に止めて，この問題を議論するのがおそらく望ましいであろう。というのも，価値表現の議論には，それと無関係な認識論的ならびに心理学的源泉から多くの曖昧さが入ってくるからである。このアプローチの様態が現状では可能ではないので，この序節は，際立った価値事実を指示しようとする特定の言語的表現に関する若干の意見を述べて結ばれよう。

１．「価値」という表現は，動詞および名詞として使われる。そして，どちらの意味が本来的であるかをめぐって基礎的な論争が存在する。もし諸価値である事物が存在すると

か，あるいはいかなる活動とも関係のない価値の本性をもつ事物が存在するとしたら，「価値づける」という動詞は派生的である。というのも，この場合，了解の行為は，単にそれが把握する対象のゆえに，価値づけと呼ばれるからである。しかしながら，もし動詞によって指示される活動的な意味が本来的であるならば，「価値」という名詞は普通の言い方で**価値がある**（*valuable*）と呼ぶところのもの――ある種の活動の対象であるもの――を指示する。例えば，ダイヤモンドや鉱山と森のように，価値づけられることから独立に存在している事物は，それらがある人間の諸活動の対象である場合には，価値がある。事物をその本来的な存在で指示するのではなく，（あるものが標的であると呼ばれる時のように）諸活動の素材や目標としてそれを指示する名詞は多くある。このことが価値と呼ばれる事物の場合（あるいはその性質）において当てはまるかどうかという問題は，論争に巻き込まれる問題の１つである。例えば，以下の引用文を取り上げてみよう。価値は「了解過程の質的内容として最もよく定義される。……それは注意や直観に現存する所与の質的内容である」。この言明は，「価値」を主に名詞として，あるいは少なくともある対象やその本質的質を指示する形容詞として，みなしているように思われよう。ところが，同じ著者が直観し了解する過程について説明するところまで進むと，彼は次のように供述する。「価値形成の行為を直観するという生の行為から識別するように思われるものは，前者が顕著に感情によって性格づけられるということである。……それは意識的に何らかの特殊な内容を識別する。しかし，価値形成の行為はまた情動的でもある。それは関心，すなわち運動－情緒的態度の意識的表現である」，と。この一節は，前に引用した節とは反対の印象を与える。また，「経験の価値－質あるいは内容は，価値－行為あるいはこの内容がその直接的対象であるところの心理学的態度から識別されてきた」とさらに踏み込んで言われるとき，事態は一段と不明瞭になる――その立場は，反対の方向に進む二頭の馬に乗って１つの問題を解決する試みのように思われる。

さらに，「価値づける」という動詞の用法に限って注目してみると，われわれは普通の会話が二重の語法を示していることに気づく。というのも，辞書を一瞥すると，日常的会話で「価値形成」や「価値づけ」という言葉は，貴重である，大事にする（また，尊敬する，崇める，のような多様なほとんどよく似た他の諸活動）という意味での**貴ぶ**（*prizing*）と，価値を**付与する**，価値を**割り与える**という意味での**値踏み**（*appraising*）とを示すために動詞的に用いられるからである。これは，１つの見積りの活動，例えば，財やサービスを金銭の用語で値踏みすることで明らかなように，比較を含む１つの行為である。その二重の意味は，価値づけに関する基本的な争点の１つがそこに含意されているがゆえに，有意義である。というのも，**貴ぶ**においては，明確な**個人的**関係を有する何らかのもの，

すなわち，特に個人的な関係に関するあらゆる作用のように，情動的と呼ばれる一面的性質を有する何らかのものに力点が置かれるからである。しかしながら，**値踏み**としての価値づけは，主として諸対象の関係的性質に関わるので，それゆえ個人的－情動的な言葉「**尊敬する**（*esteem*)」から識別された「**見積る**（*estimate*)」の中に見出される知性的な面が同じ一般的語法の最高位に位置づけられるのである。同じ動詞が2つの意味で用いられるということは，現在それによって諸学派が分かたれている問題を示唆している。その2つの意味関係のうちのどちらが，その含蓄において基本的であるのか。2つの作用は別個のものなのか，あるいは補完的なのか。語源学史に関連して，「賞賛(praise)」，「褒賞(prize)」，「価格(price)」がすべて同じラテン語に由来し，また「真価を認める(appreciate)」と「値踏みする(appraise)」がかつては互換的に用いられ，さらに「高価な(dear)」が未だに「貴い(precious)」と金銭価格の「高価な(costly)」とのいずれとも同義語として用いられているということは，(もちろん決して決定的ではないけれども)示唆的である。日常的会話で用いられる単語の二重の意味が問題をもたらす一方，現行の諸学説がしばしば動詞「価値づける(to value)」を何らかのものから快楽や満足感を得るという意味での「享受する(enjoy)」と同一視し，また作用とその結果が**一致する**という能動的な意味での「享受する」とも同一視するという事実によって，言語的慣用法の問題は――混乱するとは言わないまでも――さらに拡大される。

2．もしわれわれが価値－表現と一般にみなされる特定の言葉を取り上げるならば，その言葉の正しい位置づけに関する理論的論争には全く合意を見出せない。例えば，「良い(good)」は，**ために良い**（*good for*)，有益な，役立ちうる，助けとなるということを意味し，他方「悪い(bad)」は，有害な，損害を与えるという意味であると――暗に価値づけに関する完全な理論を含む1つの考え方を――主張する人々がいる。他の人々は，「ために良い」という意味での良いと「それ自体良い」ということとの間には著しい差異があると主張する。さらに，今述べたように，「愉快な(pleasant)」と「満足させる(gratifying)」は第一級の価値－表現であると主張する人々がいるし，他方それらに基本的な価値－表現としての地位を与えない人々がいる。価値－語としての「良い」と「正しい(right)」との各々の地位に関してもまた論争がある。

結論は，言語の用法はあまり役立たないということである。実際，それが議論に方向性を与えるために用いられると，混乱を来たす。言語的表現への関係づけが最初になしうることは，せいぜい特定の諸問題を指摘することである。これらの問題は，議論されている論点を絞るのに用いられるかもしれない。したがって，今議論している用語論に関する限り，「価値づけ」という言葉は，その理論的含蓄の中で最も中立的なものとして動詞的にも，

また名詞としても用いられるであろう。**貴ぶ**，**値踏みする**，**享受する**，等と価値づけとの関係を確定することは，更に先の議論に残しておこう。

Ⅱ．絶叫的なものとしての価値－表現

これまで進められてきた諸見解のうち最も極端なものを考察することから議論を始めよう。この見解は，価値－表現は純粋に絶叫的であるから，それは命題の構成要素，すなわち肯定したり否定したりする文章の構成要素たりえない，と断言する。「良い」，「悪い」，「正しい」，「不正な」，「愛らしい」，「忌わしい」等のような表現は，間投詞と同じ性質，つまり赤面する，微笑む，泣く，のような現象あるいはまた，他者を一定の仕方で行為させる刺激――人が牛に「しっ」と言ったり，馬に「どう」と言ったりする――と同じ性質であるとみなされる。それらは，感情についてすら，何かを言ったり告げたりはしない。それらは単に，感情を示したり表現したりするだけである。

以下の引用は，この見解を表す。「もし私が誰かに『君はその金を盗むという不正な行為をした』と言うならば，仮に私がただ『君はその金を盗んだ』と言っただけであったとしても，それ以上の何事をも**陳述している**わけではない。……それは，あたかも『君はその金を盗んだ』と独特な恐ろしい調子で言ったか，あるいは何か特別の感嘆符を付けて書き記したようなものである。その調子は……その表現が話し手の一定の感情の付加されたものであることを示すのに単に役立つだけである」。さらに，「倫理的用語は単に感情を表現するのに役立つのではない。それはまた，感情を喚起するとともに行為を刺激すべく綿密に考え抜かれるのである。……かくして，『真理を語ることは君の義務だ』という文章は，真実性に関するある種の倫理的感情の表現としても，また『真理を語れ』という命令の表現としてもみなされうる。……『真理を語ることは良い』という文章では，命令はほとんど暗示以上のものではない」。どんな根拠に基づいて，著者がそれについて「倫理的」と語るところの用語と「感情」を名づけるのかについては定かでない。にもかかわらず，この形容詞を感情に適用するのは，ある種の，すなわち採られた立場とは矛盾した結論から，感情を識別したり同一視したりするためのある客観的根拠を含むように思われる。だが，この点は無視して，先に進むことにしよう。「『寛容は徳である』と言うとき，私は私自身の感情について，あるいは他の何かについて言明しようとしているのではない。私はただ，私自身の感情を表したいのだ。それは全く，私がそれらの感情をもっていると言うことと同じではない」。したがって，「価値の問題について論じるのは不可能である」。なぜなら，ともかく何も語ったり言明したりしない文章は，なおさら相互に両立不可能ではありえな

いからである。表面上の論争や対立した言明の場合は，それが何らかの意味を有しているとすれば，その場合の――1人の男が盗みとか嘘をつくとか呼ばれる特別な行為をなしたかどうかという論争のような――事実に関する差異に帰せられうる。われわれの希望や期待は，もし「われわれが，その場合の経験的事実に関して相手をわれわれに同意させることができれば，彼はわれわれが採るのと同じ道徳的態度をそれに対して採るであろう」ということである――もっとも，その態度がなぜ「魔術的」，「好戦的」あるいは手当たり次第に選びうる数千の形容詞のうちのいずれかよりも，むしろ「道徳的」と呼ばれるのかは，またしても明らかではないのであるが。

これまで示唆されてきたように，抽象における理論の利点を議論することによってではなく，訴えられる事実を分析することによって議論は進行していく。赤ん坊の産声，彼の最初の笑い，彼が初めてクークー，ガーガー，キーキー言ったりするような，明らかに何も話をしない現象から始めよう。それらが「感情を表現する」と言われるとき，「感情」と「表現する」という言葉には危険な曖昧さがある。涙や笑みの場合に明らかなことは，思わず発せられる声音の場合にも明らかであるべきである。それらの声音は，本来表現的ではない。それらは，より大きな有機体的状態の構成要素である。それらは，有機体的行動の事実であり，いかなる意味においても価値－表現では**ない**。だがしかし，それらは，他者からある有機体的状態の**記号**としてみなされるかもしれない。そして，そのように記号**に相当するものとして**みなされたり，あるいは**兆候**として扱われたりすると，それらは，これらの他者の中にある応答的行動様式を引き起こす。ある赤ん坊が泣く。その母親は，その泣声を赤ん坊が空腹である記号とみなしたり，あるいはピンが赤ん坊に刺さっている記号だとみなしたりする。こうして，母親は，泣声を証拠である記号として用いることによって，存在すると推量される有機体的状態を変えるべく行為する。

かくして，赤ん坊は大きくなるにつれ，ある特定の泣声，つまり喚起される活動とそれに反応して生ずる結果との間に存在する関係を意識するようになる。泣声（身振り，身構え）は今や活動を喚起する**ために**，またその活動の結果を経験するためになされる。最初の反応に関して，（子供の泣声が眠っている母親を，その泣声に気づく前に，目覚めさせるような）単に刺激としての泣声によって引き起こされる活動と，何らかの**記号**や証拠と解される泣声によって喚起される活動との間には差異があるのと同様に，最初の泣声――それは正しく純粋に絶叫的と呼ばれうる――とわざと出す泣声，つまりある結果をもたらすであろう反応を喚起する意図をもった泣声との間には差異がある。後者の泣声は，言語という媒体の中に存する。それは，何かを語るだけでなく，語り伝え教えようと意図された言語的記号である。

そのときに告げられ述べられることは**何か**。この問いに関して，「感情」という言葉における致命的な曖昧さに留意する必要がある。というのも，伝達されることのすべてはせいぜい，他者の中で喚起される活動の結果の中で他者の感情を得んとする欲望を多分に伴った特定の感情の存在であるという見解が，おそらく提起されるだろうからである。しかし，そのようないかなる見解も，(a) 説明の出発点となる明白な事実に反するし，(b) 経験的に証明し得ないとは言わないまでも全く要らぬ事柄を導入する。(a) なぜならば，われわれが出発点としたのは感情ではなく，泣声，涙，笑み，赤面がその構成要素であるところの有機体的状態であったからである。(b) したがって，「感情」という言葉は，厳密に行動的な術語，つまり泣声や身振りがその一部であるところの全体的な有機体的状態に対する名称であるか，あるいは全く理由なく導入された言葉であるか，のいずれかである。問題となっている現象は，食事を採るとか体重を増やすとかいうことと異なるところのない，有機体の生活過程における出来事である。しかし，体重の増加が適正な食事の記号や証拠とみなされうるのと全く同じように，泣声は有機体の生活に何か特別なことが生じた記号や証拠とみなされうるのである。

「感情を表す」というフレーズは，「表す (evincing)」が「表現する (expressing)」と同義語であるとみなされようとなかろうと，生起していることを知らせる何の権利ももたない。元の活動——泣き叫び，笑い，泣き，号泣すること——は，既に見たように，より大きな有機体的状態の一部であるから，そのフレーズはそれに当てはまらない。泣き叫びや身体的態度が意図的になされたとき，表されたり表現されたりするのは感情ではない。公然な言語的行動は，有機体の条件の変化——誰か他者によってなされた何らかの行動結果として起こる変化——を得ようとするためになされる。もう１つ簡単な例をあげよう。舌鼓を打つことは，食事を採ると呼ばれる原初的行為の部分であり，またそうでありうる。ある社会集団では，舌鼓を打つ際の音は野暮な記し，ないしは「行儀の悪い」印であるとされる。それゆえ，子供が身体的統制力がつくまでに成長すると，彼らはこの活動をしないように教えられる。また他の社会集団では，舌鼓を打って音を立てることは，客が主人のもてなしを十分認めたことの記しとみなされる。いずれの場合でも，観察しうる行動様式とそれぞれの様式の観察しうる結果の両方の観点で，完全に記述されうるのである。

このことに関して重大な問題は，なぜ「感情」という言葉が理論的説明に導入されるのかということである。なぜなら，それは実際に起きることを伝える場合には不必要であるからである。唯一の尤もな回答がある。その言葉は，精神的用語によって，あるいは内的意識ないしはそれに類するものの状態を表す用語によって暗示される心理学的理論と称されるものから採り入れられる。さて，実際にそのような内的状態が存在するかどうかを，

われわれの目前の出来事に関わらせて問うことは，問題外の不必要なことである。というのも，たとえそのような状態があるにせよ，それらは全く個人的に記述されたものであり，個人的精査にのみ左右されうるからである。結局，たとえ純粋に精神的なものとしての意識の状態ないし感情の状態に関する正当な内観理論があるにせよ，考慮中の出来事を説明するのに，この理論から借用することは何の正当的根拠もない。そのうえ，「感情」に言及することは余計なことであり，謂れのないことである。なぜなら，与えられる説明の重要な部分は，他者からある反応を引き起こすことによって彼らの行動に影響を及ぼす「価値－表現」を用いることであるからである。経験的報告の観点から，それは無意味である。というのも，その解釈は，公共的な精査や検証に開かれていないものに関する用語で暗示されるからである。もしここで述べられたような「感情」があるとすれば，何か与えられた言葉が，相異なる２人によって用いられる場合には，同じ事物に言及していても何の確証もありえない。なぜなら，その事物は，共通の観察と記述に開かれていないからである。

そこで，更に考察を経験的意味を有する説明の部分，すなわち他者からある反応を喚起し，かつ彼らを喚起する狙いで用いられうる有機体的活動の存在に制限するなら，以下のような言明が保証される。(１) 問題となる諸現象は社会的現象である。ここで「社会的」というのは単に，２人以上の人々の間の相互作用ないしはトランザクションの性質をもった行動様式があるということである。ある人――母親や乳母――が他者によって偶然より広範な有機体的行動に向け発せられた音声を１つの記号として扱い，しかもそれにありのまま反応するのではなく，その許容内でそれに反応するときはいつも，そのような個人間的活動が存在するのである。個人間的活動は，当の有機体的な個人行動の項目が他者からある種の反応を引き起こす**ために**なされる場合，更に一層明白になる。かくして，われわれが著者のしたところに従って価値－表現を位置づけるなら，「表現 (expression)」という語の曖昧さと「感情 (feeling」」という語の見当違いとを必要なだけ除去してしまうことで，価値－表現が個人間の行動的諸関係に関わる，あるいは巻き込まれるという結論に達せられるのである。(２)記号とみなされれば(ましてや記号として用いられる場合は)，身振り，姿勢，および単語は言語的シンボルである。それらは何かを語り，命題の性質がある。例えば，病人の振りをして，病人が普通発するような声を出す人の場合を取り上げよう。その場合，その人が本当に病んでいて仕事に耐えないのか，あるいは仮病なのかを探ることは，１つの正当な課題である。その探究の結果として得られる諸結論は，確かに他者から極めて多岐に渡る応答行動を「引き起こす」であろう。その探究調査は，何が経験的に観察されうる事柄の実情であるかを決定するために実施される。それは内的な「感情」に関するものではない。医師は，高度な信頼性を有する実験テストを導出してきた。

どの親も教師も，子供がある種の「表情」や身体的態度によって大人の気に入られるように振舞うことに対して用心するようになる。そのような場合（それらはより複雑なことを含むべく容易に拡大されよう），推理を体現する命題は，動作の短い断片だけが観察される場合には，誤りに陥りやすく，逆に長い断片に基づくか綿密に検査された多様なデータに基づく場合には，多分に保証される――当の命題がすべての純粋な自然科学的命題と共通する特性である。（3）個人間の行動的状況の過程で起きる命題が価値－命題の性質があるかどうかについて，今のところ問題は生じてこなかった。到達した結論は仮定的である。もしこの学派が考えているように，含意される表現が価値－表現であるならば，そのときそれは以下のようなことになる。すなわち（ⅰ）価値づけ－現象は社会的ないし個人間の現象であり，（ⅱ）それらの現象は観察されうる出来事に関する命題――経験的なテストと実証や反証にさらされた命題――に素材を提供するようなものである，と。しかし，その限りでは，仮定は依然として１つの仮定のままである。それは，他者からある結果を伴う活動様式を求めるために，他者の活動に影響を与える狙いから生じる言明が価値づけの部類に該当する現象であるかどうかという問題を生み出す。

例えば，「火事だ！」とか「助けて！」と叫ぶ人の場合を取り上げてみよう。そこでは，観察しうる，そして命題に言明することのできるある諸結果を引き起こすために他者の行為に影響を与える意志があることは明らかでありうる。その表現は，その観察されうる脈絡の中で考えられると，複合的な性格を帯びた何かを語る。分析すると，語られることとは，（ⅰ）嫌な結果がもたらされるであろう状況が存在する，（ⅱ）その表現を述べている人はその状況に対処できない，そして（ⅲ）他者の支援が得られた場合には，改善された状況が期待される。これら３つのことのすべては，経験的証拠によってテストされうる。なぜなら，それらは観察されうる事柄に関わるからである。最後の点（期待）の内容が述べられている命題は，例えば，特殊な場合に偶然生ずることを観察することによってテストされうる。前以ってなされた観察は，もし言語的記号が喚起しようと意図された支援を獲得するために用いられるとすれば，いずれにせよ不都合になる諸結果が起きる可能性はかなり減少するという結論を立証するかもしれない。

調べてみると，これらの場合と以前に検討した，引用した章句によれば価値－表現を含む場合との間にはある種の類似性があることが分かる。諸命題は，直接的には**現存している**状況に，また間接的には作り出すことが意図され欲せられるところの**未来の**状況に関わる。記された表現は，現在の状態から未来の状態への望まれた変化をもたらす中間項として用いられる。初めに検討した例証の場合の組み合わせにおいては，「良い」と「悪い」のような価値づけ－言葉は判然と現れるが，第２群においては何ら**判然とした**価値－表現

は存在しない。しかしながら，支援を求める叫びは，その存在の脈絡に関して考えられるとき，叫び声が出されるのに関した状況が「悪い」のだということを，それほど多言を要することなく効果的に断言する。それは，排除されるという意味で「悪い」のであるが，その叫びがある反応を喚起するならば，**より良い**未来の状況が期待される。その分析は，不必要なまでに細かいと思われるかもしれない。しかし，諸例の各々の組み合わせにおいて，存在の脈絡が明晰にされなければ，用いられる言葉の表現は，どんなものをも意味させることができるし，あるいは何も意味しないようにすることもできる。脈絡が考慮されるとき，問題になってくることは現存する状態に対して相対的に否定的な価値を付与する命題，定まった将来の状態に対して比較的積極的な価値を付与する命題，およびある事態から別の事態への変化をもたらすであろう活動を喚起するよう意図された中間的命題（それはある価値づけ－表現を含むかもしれないし含まないかもしれない)である。かくして，そこには（ｉ）現存する状況への嫌悪と将来の可能的状況に対する魅力，および（ii）**目的としての魅力とそれを遂行する手段としてのある諸活動との間の詳述できテストもできる関係**，が含まれている。このようにして，更なる議論のために２つの問題が設けられる。その１つは，(同一であることの確認のために）**好き嫌い**と呼ばれうるものと能動的ないし行動的態度との関係であり，もう１つは手段－目的としての事物と価値の関係である。

Ⅲ．好き嫌いとしての価値づけ

前節で述べられたことから，価値づけとの関係での好き嫌いは，観察され同一視されうる行動様式という意味で考察されるべきだということになる。行動的なものとして形容詞「情動的－運動的（affective-motor)」が適用されうる。もっとも，「情動的」性質を私秘的な「感情」という意味で解釈されることのないよう注意しなければならない――それは「運動的」で表現される能動的かつ観察可能な要素を無にする解釈である。というのも，「運動的」は公共的かつ観察可能な世界で生起し，そこで生起する他の何ものとも同じように，観察されうる条件と結果を有するからである。だとすれば，「好き」という言葉が（私秘的かつ接近不可能な感情に対する名称としてではなく）１つの行動様式を示す名称として用いられる場合，それはどんな種類の活動を表すのか。その指示するものは何か。この質問は，「気にかける（caring)」「世話をする（caring for)」という言葉が行動の一様式として「好き（liking)」と密接に結びついており，他の実質的同義語は「気をつける，あるいは注意を払う（looking out for or after)」「大事にする（cherishing)」「献身する（being devoted to)」，および「面倒を見る(tending)」「仕える(ministering)」「育成する(fostering)」

という意味での「注意して勤める（attending to)」――先に見たように，すべて辞書で認められる２つの重要な意義のうちの１つである「貴ぶ（prizing)」に関わりのあるものの変形であるように思われる言葉――であるということに注目することによって進められる。これらの言葉が行動的な意味でとらえられるとき，すなわちある一定の条件を維持し獲得するために起こす諸活動に名づけるものととらえられるとき，それらの言葉によって指示されるものを「享受する（enjoy)」というような曖昧な言葉によって指示されるものから区別することが可能になる。というのも，「享受する」という言葉は満足を生み出す条件やそれを存続させる条件として行使されたいかなる情動的－運動的行為とも隔絶した，既に存在している何かから満足を**受け取る**条件を指しうるからである。さもないと，その言葉は満足を生み出し存続せしめる活動にまさに関わりうる。その場合，「享受する」は喜んで努力する活動と同義語であり，満足がそこから受け取られる**条件の存在**を恒久化するために所謂「骨を折る」，味わうという一定の調子を有する。この活動的な意味で享受することは，満足の源泉である諸条件を確保するために使われるエネルギーによって特徴づけられる。

これまで述べてきたことは，指示するものとしての対象から孤立した言葉に意義を付与しようとする無益な努力を理論から切り離そうとする目的に役立つ。われわれはむしろ，詳述しうる現存の状況を喚起し，その諸状況の中で生起するものを観察する方に向かう。われわれは，エネルギーが存在を生み出すのに出されるのか，特定の条件を存在の中で維持するために出されるのか，観察するよう仕向けられるのである。平たく言えば，努力が喚起されるかどうか，他の条件よりもむしろある特定の存在を引き起こすべく骨が折られたかどうか，つまり欲せられるものに反する諸条件が存在することを示すエネルギー消費の必要性，に仕向けられるのである。自分の子供を大切にし，子供と一緒にいることを楽しむ（その言葉の能動的な意味で）振りをするが，しかし実際のところは子供をもっぱら無視し，子供と一緒になる機会を求めようとはしない母親は，自己を欺いているのだ。もし彼女がさらに他人がいるときだけ――あやすようなことをして――愛しているわざとらしい記しを見せつけるなら，彼女は多分他人をも欺こうとしているのだ。存在と価値づけの記述とが決定されなければならないのは，行動の観察――その観察は（最後の例で分かるように）かなりの空間－時間に拡げられる必要がありうるが――によるものである。費やされるエネルギーの量とそれが持続する時間の長さを観察することによって，「僅か」や「かなりの」というような修飾する形容詞を所与の価値づけに保証付きでつけることが可能になる。～に向かって，～から去って，というようにエネルギーが取ると観察される方向によって，「肯定的」価値づけと「否定的」価値づけを根本的に区別することが可能

になる。もしそれに加えて「感情」がそこにあっても，その存在は，価値づけに関してなされうるいかなる検証可能な命題とも何の関わりもないのである。

何か欠けているものを生じせしめる必要がある，あるいは外的条件によって脅かされる何かを存在させておく必要がある場合にのみ，貴ぶや世話をするという意味での価値づけが生ずるがゆえに，価値づけは欲望すること（desiring）を含むのである。後者（desiring）は，願望が努力なしに起きるという意味での単に願望すること（wishing）とは区別されるべきである。「叶わぬ望みを無闇に抱くな」。何か欠けているものがある，そしてそれがあれば有難いのだが，しかし無いものを生ぜしめるのに費やすエネルギーが全くないか，さもなければ所与の条件の下で欠けたものを生ぜしめる努力を全く費やさない――幼児が月を求めて叫ぶときや，幼稚な大人が事情が違ってさえいたら万事がどれほどうまくいくかといった夢に耽っているときのように。「欲望すること」と「願望すること」という名詞が各々適用される場合において，**指示するもの**は基本的に異なっている。したがって，「価値づけ」が欲望することという観点で規定される場合，前提要件は，それがそこで生じ機能するところの現存する脈絡によって欲望を取り扱うことである。もし「価値づけ」が何か独自なもの，それ自体で完結したものとしての欲望の観点で規定されるなら，それによってある欲望を他の欲望から区別する何ものもないし，したがって相互に比較してさまざまな価値づけの価値を測る何の方法もない。欲望は欲望なのだ，ただそれだけのことしか言われない。さらに，その場合，欲望は**単に**個人的なものと考えられ，したがって他の対象や出来事によって述べられうるものとは考えられない。例えば，欲望が努力となって現れることや，一所懸命やった努力が現存の条件を変えることを認めざるを得なくなれば，こうした考察は欲望とは全く縁のない事柄とみなされるであろう――すなわち，もし欲望が独自のもので，それ自体で完結している，つまり観察されうる脈絡の状況から独立していると考えられるならば，そのようになるであろう。

しかしながら，欲望が特定の現存の脈絡（つまり何らかの欠如が能動的傾向をもった直接的な実行を妨害するような脈絡）の中でのみ生ずるのが見られるとき，そして欲望が現存する欲求を満たすような仕方でこれらの脈絡に関して機能するのが見られるとき，欲望と価値づけの関係は，検証可能な命題で言明することを可能にするとともに，それを必要とすることが分かる。（ｉ）欲望の内容と対象は，それらが生ずる特定の脈絡に依存するのが見られる。すなわち，個人的な関係とそれを取り巻く諸条件両者の先行する状態に交互に依存することが見られるのだ。例えば，食べ物に対する欲望は，5時間前に食べたのと５日前に食べたのでは同じではなかろうし，また小屋と御殿では，あるいは遊牧民と農耕民族では，食べ物の中身は同じではなかろう。（ii）努力は，欲望に続いて来るもので

はなく，欲望に含まれる緊張のまさしく本質であると見られる。というのも，欲望は単に個人的なものではなく，(空腹の場合に明らかなように)環境と有機体の能動的関係であり，それが本当の欲望と単なる願望や空想との区別する要因なのである。したがって，欲望との関係での価値づけは，現存の状況と繋がっており，現存の脈絡における差異とともに異なることになる。価値づけの存在が状況に依存するので，その妥当性は状況によって課される需要と要求への適応性に依存する。状況が観察に開かれているので，また観察されるものとしての努力－行動の帰結がその適応性を決定するので，所与の欲望の妥当性は命題で言明されうる。その命題は経験的にテスト可能である。なぜなら，所与の欲望と欲望がそれと関わりながら機能するところの条件との間に存する関係が，これらの観察によって確かめられるからである。

「関心（interest)」という言葉は，個人的活動と価値づけの理論において考慮されなければならない諸条件との間の能動的な関係を強力に暗示する。語源学においてさえ，それは，人間もそれを取り巻く諸条件も共にそこで相互に密接な関係に参与する何らかのものを指示する。両者の間に生じるこのあるものを名づける場合，それは１つのトランザクションを名づける。それは外的条件の媒介を通して働くところの１つの活動を指す。例えば，われわれが仮に銀行家の関心，労働組合の関心，政治組織の関心，といった何か特殊な集団の関心について考える場合，単に精神状態を考えるのではなく，それがはっきりした結果を生み出すような条件を獲得し確実にするための行為を志向するところの組織化されたチャネルを有する圧力団体としての集団を考えるのである。個々の人間の場合においても同様に，法廷が個人をあることに関心をもっていると認める場合には，その人が押し通せば，現存する問題あるいは結果に影響を与えるような主張を彼が持っていることを法廷は認める。人があることに関心をもっているときはいつも，彼は出来事の過程においても，またその終局の成行きにおいても利害（stake）――彼をして何か他の結果よりもむしろある特定の結果を生ぜしめるように行為させるような利害――を持っている。

ここで挙げた事実から，価値づけ（および「価値」）を欲望ならびに関心と結びつける見解は出発点にすぎないということになる。関心と欲望が分析されるまでは，そして具体的な特殊な出来事のおける欲望と関心の構成要素を決定する方法が確立されるまでは，価値づけの理論を支えるには不確定だ。実際に，価値づけを欲望と結びつける諸理論の誤謬のすべては，「欲望」一般を取り上げることから生ずる。例えば，「価値は生命衝動の直接的かつ説明不可能な反動と，われわれの本性の非合理的部分**から発する**」と（全く正しく）言われるとき，実際に述べられていることは，生命衝動が欲望の存在の**因果的条件**であるということである。「生命衝動」に経験的に検証可能な唯一の解釈（有機的生物学的傾向

をもった解釈）が加えられるとき，「非合理的」要因が価値づけの因果的条件であるという事実は，価値づけが**それ自身として考えられた**いかなる存在とも同様に，不合理的（a-rational）な**存在の内に**その根源をもつということである。正確に解釈すれば，その言明はかくて，有機体的傾向は他の諸存在（「非合理的」という言葉は「存在」そのものには何も加えない）と結びつけられる存在であり，それゆえ観察可能であるという暗示である。しかし，引用された文章はしばしば，生命衝動が価値づけ**である**ことを意味するのだと解される――価値づけを欲望と関心に結びつける見解，およびその論法によって，樹木が種子「から生ずる」のだから樹木は種子だという言明を妥当としうるような見解，とは相容れない解釈である。生命衝動は，疑いなく欲望と関心の存在に**必要不可欠な**条件である。しかし，欲望と関心は，目的を実現させるのに必要とされる方法（エネルギーの消費を含めて）の記号形式の内に着想と並んで予想される諸結果を含む。価値づけが欲望や関心の活動と同一視されるとき，価値づけと生命衝動との同一視は否認される。というのも，その同一視は，何らかの「生命衝動」を含まないものはありえないから，どんな種類のどの有機体的活動も価値づけの働きとする馬鹿げたことになりかねないからである。

「価値とは何らかの関心の何らかの対象である」という見解も，大いに警戒して考えねばならない。表面的には，それはあらゆる関心を全く同じレベルに置く。しかし，関心がある状況においてその場所との関連で具体的に作り上げられたものの内に検討されるとき，すべてのものがその関心の内に含まれる対象に依存することは明白である。これは次に，現状に関するニーズが配慮して調べられてきたことに，そしてそうしたニーズを満足させたり充足したりするために提案された行為の能力が配慮して検討されてきたことに，依存する。あらゆる関心が評価者としてのその機能に関して同じ立場に立つということは，日常経験のどんな平凡なことを見ても許されないのである。夜盗罪とその成果への関心は，ある特定の対象に価値を付与することであると言えよう。しかし，夜盗と警官の価値づけは一致しない。それは生産的な仕事への関心が設定する価値と，夜盗がその仕事をしている際の関心が設定する価値とが同じでないのと同様である――盗品を見せるためにそれが持ち込まれるときの裁判官の処置で明らかなように。関心は一定の現存する脈絡において生じ，当てもなく空虚の内に生ずるのではないから，またこれらの脈絡は１人の人や集団の生活の中の状況であるから，関心は，いかなる人の価値づけ能力もそれが属する組み合わせの１つの機能であるように相互に結合される。価値は平等に何らかの関心の何らかの対象であるという考え方は，関心を相互に完全に隔絶した見解――その見解は，欲望と関心が行動様式ではなく単なる「感情」であると主張する内観的心理学の系列としてのみしか関心の存在が説明されえないほど，容易に観察される事実が除去されている見解――に

立ってのみ支持されうる。

Ⅳ. 値踏みの諸命題

欲望と関心は，世界の中で生起し，そして世界で影響をもつ諸活動であるので，それ自体またその観察される諸結果に関して観察されうる。したがって，価値づけを欲望ならびに関心と関係づけるいかなる理論について，われわれは今やゴールの見えるところ――価値づけ－命題の発見――にまで来ているのだ，と思われるかもしれない。事実，価値づけに関する諸命題は可能であることが示されてきた。しかし，それらは，ポテトに関する諸命題がポテト－命題であるという意味でのみ，価値づけ－命題なのである。それらは事実についての命題である。これらの諸事象がたまたま価値づけになるという事実は，その命題をいかなる特有の意味でも価値づけ－命題にするものではない，にもかかわらず，そのような事実命題が作られうるという事実は重要なのである。というのも，それらが存在しなければ，**特有な**意味での価値－命題が存在しうるということを想定するのが二重に馬鹿げてしまうからである。人間活動の主体が事実命題の設定に何の理論的障害もなさないということもまた，示されてきた。というのも，人間の行動は観察に開かれているからである。そのような行動（すなわち，その要素的諸行為の諸関係）に関する妥当な一般的命題の設立には実際的障害があるが，その諸条件と諸結果は探査されうる。その諸条件と諸結果によって作られる価値づけに関する諸命題は，**特有の**意味での価値づけ－命題の存在に関する問題に限定する。現存する価値づけそのものに関する諸命題は値踏みすることが可能であるか，またなされた場合の値踏みが更なる価値づけの構成に参入することができるか。母親が子供を大事にしたり可愛がったりすることは，既に見たように，観察によって決められよう。また，いろいろと大事にしたり世話したりするその条件と結果は，理論的には相互に比較され対照されうる。最後の結果が，ある種の大事にするという行為が他の行為**よりも勝っている**ことを示すことになる場合，価値づけ－行為はそれ自体評価され，その評価は更なる大事にするという直接的行為を修正しうる。この条件が満たされたなら，実際に生起する価値づけに関する諸命題は，特有の意味，すなわち物理学の命題からも，また人間が実際になしたことに関する歴史的命題からもそれを区別するという意味で，価値づけの主題になる。

われわれは，かくして，見たように「価値づけ」の２つの認められた意義の内の１つである値踏みや評価の性質の問題に到達した。「この土地の区画は正面１フート当たり200ドルの値である」というような基本的な値踏み命題を取り上げてみよう。それは，「正面が

200フィートある」という命題とは形式的に異なる。後の文章は，既成の事実に関する事柄を述べている。前の文章は，遂行されるべき行為を決定するための規則を述べており，それは未来に関わるものであり，既に完成したりなされたりした何かに関わるものではない。もし税額査定者の働く脈絡で述べられるなら，それは所有者に対して税金を課するための規定条件を述べている。もし所有者が不動産ディーラーに述べるなら，それはディーラーが土地を買う際に守るべき規定条件を述べている。将来の行為や状態は，何が起きるだろうかという予言としてではなく，起きる**はず**の，あるいは起きる**べき**何かとして述べられる。かくして，命題は規範を定めるのだと言われるかもしれないが，しかし「規範」は，将来の行為の定まった形式において適合されるべき条件という意味で単に理解されなければならない。規則が人間関係のすべての様相にほとんど偏在しているということは，あまりにも明白なので論証を要しない。規則は，「道徳的」という名が適用される諸活動に決して限定されない。芸術や専門職における活動のあらゆる回帰的形式は，目論見を成し遂げる最善の方法に関する規則を発展させる。そのような規則は，提案された行動様式の価値を判断するための規準あるいは「規範」として用いられる。賢明あるいは不賢明な，経済的あるいは浪費的，効果的あるいは無益な，というような異なった分野における行動様式の価値づけがあるということは，否定できない。問題は，(すべての行為の規則が一般的であるので)一般的命題としての規則が存するということではなく，規則が単なる慣習，慣例，伝統だけを表現するのか，あるいは手段としての事物と結果としての事物との間の関係――その関係は，通常因果関係と命名されるような，それ自体経験的に確かめられテストされる存在関係に基礎づけられるのである――を述べることが可能であるかということに関わる。

工芸，芸術，科学技術の場合，これらの選択肢の内どれが正しいかは疑問の余地がない。例えば，医術は，単に薬剤の方面だけでなくダイエットや生活習慣の方面でも患者にどうすれば**より良い**かということに関して医師がその患者に与える規則の多くは，実験的に確証された化学や物理学の原理に基礎づけられる状態に近づきつつある。工学者が，ある荷重を支えることのできる橋がハドソン川のあるポイントに架橋されるとしたら，特定の技術的操作の下にしかじかの材料が**必要とされる**と言うとき，その工学者の忠告は個人的な意見や気まぐれを表明するのではなく，承認された物理的法則に裏付けられているのである。ラジオや自動車のような装置は最初に発明されたとき以来ずっと改善（改良）されてきており，またその手段と結果の関係における改良は基本的な物理的原理のより適切な科学的知識によるものである，と一般に信じられている。この議論は，慣習や慣行の影響が全く除去されるという信念を要求しない。そのような例は，値踏みや評価の規則が科学的

に保証された物理学的一般化に依拠しうるということ，また単なる慣習的習慣を表わすこの種の規則の割合が増加しつつあるということを示すことで十分である。

医療の際に，やぶ医者は自分が申し出る治療を行なうための明白な根拠として確実だという多数の治療を引き合いに出す。彼が勧める処置がどの点で有能な医師が「良い」とか「必要だ」とか言った処置と違っているのか示すには，ほんの僅か検証すれば十分である。例えば，病状が治そうとして治療を勧められている病気に実際に似ていることを示すための証拠として示されたその病状を，分析することはできない。また，（証明されるというよりも）回復したといわれるその回復が実際には不定数の他の要因のいずれかによるのではなく，当の薬を服用したためだったということを示すよう分析することはできない。すべてのことは総じて，何の諸条件の分析的統制なしに主張される。さらに，科学的手法の第１の要件――すなわち材料と過程に関する十分な公開性――が欠如している。これらのありふれた事を持ち出した理由はただ，有能な医師の手腕との対比は，有能な医師の技術における処置の規則がテストされた経験的命題の保証をどの程度までするか，ということを示すということである。より良いやより悪い，より役に立つや役に立たぬ，というような行為の過程の値踏みは，非人間的な主題に関する無価値な命題と同様，実験的に正当化される。進歩した工学テクノロジーにおいて，採用すべき**適切な**行為の進行を述べる命題は，明らかに物理学や化学の一般化に基礎づけられる。それらは，しばしば応用科学として言及される。にもかかわらず，不適当で悪い手法とは異なった，適合的で良い手法のために規則を立てる命題は，その命題が依拠する科学的命題とは形式的に異なる。というのも，それらの命題は，特定の欲望され意図された目的を遂行する手段としての科学的一般化を，人間活動の内に，そしてそれによって用いるための規則であるからである。

これらの値踏みの検討は，それらの値踏みが**目的**や**結果**と**手段**の関係を相互に支えるようにして，事物に関係していることを示している。より良いあるいは必要な行為に関する規則を含む値踏みがあるところではどこでも，到達されるべき目的がある。その値踏みは，有用性や必要性に関する事物の価値づけである。もし以前に与えられた諸例を取り上げるならば，不動産が税を課したり売価を決めるために査定され，医学的処置が健康の回復をもたらすという目的に関して査定され，材料と技術が橋，ラジオ，自動車などを作ることに関して価値づけられる，ということは明らかである。鳥がいわゆる純粋な「本能」だけで巣を作るとすれば，目的に対するその適合性に関して材料や手法を査定する必要はない。しかしもしその結果――巣――が欲望の対象として企画されたのであれば，最も気まぐれな類の試行錯誤が働いているか，あるいは欲望された対象を生ぜしめるために材料や手法の適合性と有用性が考慮されているか，のいずれかである。そして，この秤量過程は明ら

かに，代替可能な手段として異なった材料と作業の比較を含むのである。全くの「本能」や完全な試行錯誤の場合を除いて，いずれの場合においても，特定の結果の産出には現実的な材料の観察とその潜在的な力の推計が含まれる。**達せられた結果**には意図された結果との比較対照で常に何らかの観察が存する。それゆえ，その比較は，手段として用いられる事物の現実的適合性に光を当てるのである。かくして，それは，その適合性や有用性に関して未来におけるより良い判断を可能にするのである。そのような観察に基づいて，ある行動様式は愚かであり，出過ぎており，知恵がないと判断され，また別の行動様式は分別があり，思慮深く，賢明であると判断される。その識別は，実際に到達した目的や結果と手段としての事物との関係について到達した見積りの妥当性に基づいてなされるのである。

この価値づけの見解に対して提起されるいつもの反論は，価値づけはただ手段としての事物にのみ当てはまるのに対し，純粋の価値づけである命題は**目的**としての事物に当てはまるということである。この点は，いずれ端的に考察されよう。しかし，ここで明記されうることは，目的は手段としての事物が秤量されるのと同じ評価の下で値踏みされるということである。例えば，ある目的が暗示される。しかし，事物がその目的に対する手段として測られる場合，それに達するにはあまりにも時間がかかりすぎるだろうとか，あまりにも多くの精力を使いすぎるだろうということが，あるいは仮に目的が達成されても，それに随伴する不都合や将来的な困難さの見込みをそれと一緒にもたらすであろうということが見出される。したがって，それは「悪い」目的として値踏みされ拒否されるのである。

到達した結論は以下のように要約されよう。（1）実際に生じた価値づけ（すなわち過去に生起した貴ぶこと，欲望，および関心）に関する命題だけでなく，ある事物を一定の存在関係において良い，適した，あるいは適当だと評述し定義する命題もある。これらの命題はさらに，材料の適切な利用のための規則を形成するので，**一般化**でもある。（2）問題となる存在関係は，手段－目的あるいは手段－結果の関係である。（3）これら一般化された形式での命題は，科学的に保証された経験的命題に依拠しうるし，また意図された結果と比較して実際に達成された結果を観察することでそれ自身テストされうる。

今提起した見解に対して持ち込まれる反論は，直接的・内在的に自ずから，またそれ自体良くかつ正しい事物と，単に他の何らかのもののために良い事物とを区別することができないということである。換言すれば，後者は，本来また自ずから価値があると言われているような事物に達するために有益である。なぜなら，それらはそれ自身のために貴ばれ，他の何かの手段として貴ばれるのではないからである。2つの異なった「良い」（と「正しい」）の意味の区別は，価値づけと価値の理論全体にとって決定的であるので，その区

別をできないことは，これまで述べてきた結論の妥当性を打ち壊すことになる，と主張される。この反論は明確に，**手段**と**目的**のカテゴリー相互の関係の問題を考察するよう迫る。既述した「価値づけ」の二重の意味の観点で，**貴ぶことと値踏みすること**との相互の関係の問題が表面化してくる。というのも，その反論によると，値踏みすることは**手段**にのみ当てはまるのに対し，貴ぶことは**目的**である事物に当てはまるからである。それゆえ，十分に充実した意味での価値づけと二義的で派生的な事象としての価値づけとの間の差異が認められなければならない。

貴ぶことと価値づけとの関係が認められ，また欲望（および関心）と貴ぶこととの関係も認められるとしよう。すると，手段としての事物の値踏みと目的としての事物の尊重との関係をめぐる問題は，以下のような形式をとる。目的－価値の設定を直接的にもたらす欲望や関心（お好みならば「好み」）は手段としての事物の値踏みとは無関係なのか，あるいはこの値踏みに密接に影響されるのか。例えば，ある人が調査の結果，ある欲望の実現に必要な手段である諸条件を獲得するには莫大な労力（おそらく同じ努力によって得られたかもしれない他の目的－価値の犠牲を含めて）が要求されることに気づけば，元の欲望，従って定義によれば彼の価値づけを修正するように反応するだろうか。何らかの思慮深い活動において行われることを調べれば，この問いに対する肯定的な回答が得られる。欲望の実行の手段である諸条件，および手段として実際に到達した結果を決定する諸条件の観点でさまざまな代替的欲望（従って目的－諸価値）を秤量することがないとしたら，熟慮は何のためにあるのか。結果に達する因果的条件として機能する諸条件を除いては，結果を予見する（従って目論見を形成する）働きを支配するものは何もありえない。目論見としてとられたいかなる対象もそこで言明されうる（あるいは明白に述べられる）ところの命題は，現存する諸条件が検討されてきた程度までちょうど**保証され**，そして手段としての能力において査定されるのである。この言明に唯一代わるものは，何らの思慮も働かず，何の目論見も形成されず，ただたまたま現れるどんな衝動に対しても直接的に行為するということである。

目論見が形成され，そして初めの衝動的傾向が熟慮を通して１つの**選ばれた**欲望に形作られるような経験をいくらか探ってみると，到達されるべき目的として最終的に価値づけられる対象は，手段として現存する諸条件の値踏みによって具体的な形で決定されることが明らかになる。しかしながら，目的の概念を手段の概念と完全に切り離す習慣が長い哲学的伝統のために非常にしみ込んでいるので，更なる議論が求められる。

１．一方で事物を有用な，役立つものとして，また他方でそれを**本来的**に良いものとして，両者には明確な区別がある，それゆえ好都合なもの，慎重なもの，得策であるものに関す

る命題と本来的に望ましいものに関する命題の間には区別があるという一般的な仮定は，いずれにせよ自明の真理を述べていない。「慎重な」「分別のある」「便宜的な」というような言葉が長期的には，あるいはあらゆる諸条件を調べ上げた後には，いとも容易に「賢明な」という言葉になるという事実は，手段としての事物の考察とは別に描かれた目的が不合理までに馬鹿げていることを示唆している（もっとも，もちろんそれを証明するわけではないが）。

2．常識は，ある欲望や関心を近視眼的で「盲目的」だとみなし，対照的に他のものを啓発された先見性のあるものとみなす。それは，かりそめにも，すべての欲望や関心を一括して目的－価値について同じ状態にあるものとはみなさない。それぞれの欲望や関心を近視眼的なものと先見性のあるものとに区別することは，所与の欲望の対象が翻ってそれ自身，更に先の諸結果を条件づける手段と見られるかどうかに基づいて正確になされる。「直接的な」欲望と価値づけを賛美する見方をとらずに，常識はそれが短期的判断の本性そのものだとして媒介するのを拒む扱いをとる。というのも，目的を**単に**直接的またもっぱら終局的に扱うことは，その後に何が生ずるかを，特定の目的が達成されるという理由で考察するのを拒否するに等しいからである。

3．「内在的」「本来的」「直接的」という言葉は曖昧に用いられるので，誤った結論に達する。実際にいかなる対象や出来事にも属するいかなる特性や特質も，まさしく直接的，内在的，あるいは本来的であると言われる。その誤謬は，これらの語によって指示されるものを他のいかなるものとも無関係な，従って絶対的なものとして解釈することにある。例えば，**手段**とは定義上，関係的なもの，媒介され媒介するものである。なぜなら，手段は，現状とその手段を用いることで引き起こされる状況との間に介在するからである。しかし，手段として用いられる**事物**の関係的性格は，事物がそれ自身の直接的質をもつことを妨げない。したがって，当の事物が尊重され切望される場合，価値の特性を貴ぶことに結びつける理論によると，その事物は必然的に価値の直接的質をもつ。手段と道具が価値づけられるとき，結果する価値－質は単に道具的なものであるという考え方は，決して駄洒落以上の何ものでもない。貴ぶことや欲望することの性質には，手段である事物にそれが向けられることを妨げる何ものもないし，また手段の性質には，それが欲され貴ばれることに反対する何ものもない。経験的事実において，ある人が所与の目的に付与する価値の尺度は，その貴重さについて彼が言うことではなく，それなしには達成されえない**手段**の獲得と使用に充てる配慮である。どんな分野でも，目的を立てた人がそれを生み出すための道具と働きに愛情ある配慮を与えなかったのに顕著な成功を収めたような事例は（全然偶発的なことは除いて）全く引き出せない。達せられる目的が用いられる手段に依存す

ることは，まさに今述べたことが実際にはトートロジーに帰してしまうようなものである。欲望と関心の欠如は，必要な手段を無視し，またそれに無関心であることによって証明される。欲望と関心の態度が発展してしまうや否や，精魂こめて注目されることなしには表面上貴ばれている目的は達せられないであろうから，当の欲望や関心は他の事物が目的を達成するのに必要な手段であると見られれば何でもそれに自動的に惹きつけられてしまう。

「直接的」という語に当てはまる考察は，「本来的」や「内在的」にも当てはまる。価値の特性を含めて，特性とは，もしそれが実際に何らかのものに属しているならば，内在的である。そして，それが属しているか否かの問題は**事実**の問題であり，内在性の概念の弁証法的操作によって決定されうる問題ではない。もし手段としてのある事物を獲得せんとする熱烈な欲望をもつならば，価値の特性はその事物に属し，それに内在しているのである。その間は，そうした手段を作り出したり獲得したりすることが，その目論見なので**ある**。他の何ものにも無関係であるものだけがまさしく内在的と呼ばれるという考え方は，それ自体馬鹿げているだけでなく，目的としての対象の価値を欲望と関心に結びつける理論そのものに矛盾する。というのも，この見解は明らかに目的対象の価値を関係的とするからであり，したがって，もし内在的なるものが非関係的なるものと同一視されるなら，この見解では内在的価値は全く存在しないことになる。他方，この場合にその特性が存在することが事実であるとすれば，それが属するところのものは１つの関係によって条件づけられるので，手段の関係的性格はその価値が内在的でない証拠として持ち出されえないことになる。同様の考察は，価値－質に適用される「本来的」や「付帯的」というような語にも当てはまる。厳密に言えば，「付帯的価値」という語句は用語上の矛盾を含んでいる。関係的特性は，それが何か「付帯的な」ものに**起因して**生じたゆえに，それがまさにあるがままのものであるという本来的価値を失わない。そのような次第である理論は，本来的性質があたかも存在しないという見解に論理的に帰着するであろう。なぜなら，**赤い**，**甘い**，**硬い**，等といった本来的性質がその生成に関して因果的に条件づけられるということが示されうるからである。再び，厄介なのは，概念の弁証法が現実の経験的事実の検討に代置されてきたことである。本来的であることはいかなる関係からも離れていることだという見解の極端な例は，諸価値は本来的で**ある**のだから，それが**いかなる**関係にも，しかも確かに人間関係にも依存することができないと主張する著者達に見出される。したがって，この学派は，価値－特性を欲望や関心と結びつける人々を，その人達が手段と目的の価値の区別を道具的価値と本来的価値の区別と同等視するのと全く同じ理由で攻撃するのである。この極端な非自然主義的学派の見解は，したがって「本来性」の抽象的概念の分

析が経験的出来事の分析に代用されるときに生ずることを明確に暴露したものとみなせよう。

目的としての対象の価値づけがますます公然かつ強力に欲望や関心と結びつけられるにつれて，欲望や関心はそれらが環境条件と協調的に相互作用しなければ効果的ではないので，他の手段と相互に関連した手段としての欲望や関心の価値づけは，目的としての対象の妥当な値踏みのための唯一の条件であるということが，一層明白になるはずである。科学的知識の対象が**いかなる場合でも**変化の確証された相関関係であるという教訓が習得されたならば，**目的として**考えられるいかなるものも，それ自身の内容あるいは構成要素において，手段として機能する人格的ならびに超人格的なエネルギーの相関関係であることが，否定の可能性を越えて見られるであろう。**実際の**結果としての，つまり現存する成果としての目的は，科学的に分析されるいかなる他の出来事とも同様に，それを経過せしめる諸条件の相互作用以外の何ものでもない。したがって，欲望や関心の対象の**観念**，つまり実際にもたらされる目的や成果から区別された**目論見**（*end-in-view*）は，それがこれら機能的な諸条件の観点で形成される厳密な程度で保証される，ということに必然的になる。

価値づけを欲望と関心に関係づける現行の価値づけの諸理論の主要な短所は，具体的な欲望と関心をそれらが実際に存在するままに，経験的に分析することができないことに起因する。そのような分析がなされた場合，ある重要な考察事項が直ちに現れてくる。

（ｉ）欲望は失望にさらされるし，また関心は挫折にさらされる。欲望された目的を達する際に失敗が生じる可能性は，（否定的に価値づけられた）障害としてか，あるいは積極的な拠り所としてかのいずれかとして機能する諸条件に基づいて，欲望と関心（およびそれらが含む対象）を形成することができないその直接的な割合の内に存する。合理的な欲望や関心と不合理なそれらとの相違は，偶然に生じて，実際にその成果を決定するであろう諸条件を考慮して再構成されたものではないものと，現存する債務と潜在的資源に基づいて形成されたものとのまさしく相違である。諸欲望が最初に現れてくるままでは，そうした欲望は原生的な有機体的傾向性と獲得された習慣からなる機構の産物であるということは，否定できない事実である。成熟に至るあらゆる成長は，そのような傾向性に直接委ねることにあるのでは**なく**，**もし**それらの傾向性に従う**ならば**，それがもたらすだろう諸結果を考慮して――手段としての超人格的諸条件と関連して働く，手段としての傾向性を判断したり評価したりするのと等しい操作をして――最初に現れた傾向性を作り直すことにある。自らを欲望と関心に関係づける価値づけの諸理論は，ケーキを食べてそれを手に持つことはできない。その諸理論は，（有機体的機構の産物として）ちょうど衝動がた

またま起こるように，欲望と関心を衝動と同一視する見解と，その結果の予想を通じた生の衝動の変更として欲望をとらえる見解との間を絶えず行き来することはできない。後者のみが欲望であり，衝動と欲望の相違のすべては，欲望の内に目論見が存する，つまり予想された結果としての対象が存するということによってなされる。その予想は，実際にその成行きを決定するだろう諸条件を検討することによってそれが構成される程度に応じて信頼されうるであろう。この点があまりに執拗に説かれているように思われるならば，それは，一番重大な論点が特有の価値づけ－命題の可能性以外の何ものでもなく，またそれ以下の何ものでもないからである。というのも，明白な保証と経験的なテストを有する諸命題が手段としての事物の評価の場合では可能であることは，否定できないからである。したがって，もしこれらの命題が目的の価値づけである関心と欲望の形成に入り込むならば，目的の価値づけはそれによって本物の経験的肯定および否定の主題とされる。

（ii）われわれは一般に，「経験からの学習」とか個人や集団の「成熟」とかについて語る。そのような表現は何を意味するのか。少なくとも，個々人や人類の歴史おいては，原初的で比較的無反省な衝動と動きの取れぬ習慣から批判的探究の結果を組み込む欲望と関心への変化が生起するということが意味される。この過程を検討するとき，それが欲望され提案された目的（**目論見**）と達成された目的あるいは実際の結果との間に見出される相違を慎重に観察することに基づいて主として生起することが見られる。欲せられ予期される目的と実際に獲得されるものとの一致は，欲望された目的に対する手段として働く諸条件の選択を確実にする。失望と挫折として経験される齟齬は，失敗の原因を発見する探究へと導く。この探究は，その下で衝動と習慣が形成され，その中でそれらが作用するところの諸条件の更なる徹底的な検討からなる。その結果は，行為の情動－運動条件の知的ないしは観念的なものとの結合を通して，ありのままの欲望と関心の形成となる。知的なもの観念的なものは，いかなる種類にせよ目論見があれば，それがどんなに偶然的に形成されたものであっても，どんな場合にも存在するのであるのに対し，目論見はそれを実現する条件によって目的が構成されるまさにその程度において妥当するのである。というのも，いずれにせよとにかく何らかの種類の**目論見**があるところではどこでも，情動的－観念的－運動作用があるからである。つまり，価値づけの二重の意味の観点で，貴ぶことと値踏みすることの結合があるのだ。かくして，予期されたり目論まれたりされた目的との一致と相違において得られた成果，つまり**実際の**結果を観察することは，それによって欲望と関心（従って価値づけ）が成熟せしめられテストされるところの諸条件を用意する。欲望と関心のままに行動する結果，あるいは時々言われるようにそれに**身を任せる**結果が何かを学習することでわれわれの欲望と関心を変えることはできないという考え方ほど，常識

に反したことは想像できない。その証拠に，甘やかされた子供や「現実を直視」できない大人を指摘する必要はなかろう。だが，価値づけと価値の理論に関する限り，目的の価値づけを手段の値踏みから切り離すいかなる理論も，甘やかされた子供や無責任な大人を成熟した健全な人と同等視してしまうのである。

（iii）競合する欲望と関心の形成と選択に関与するときには，誰もが経験から知りうる程度において，何が望まれるかと何が望まれうるかを区別する。この言明には，こじつけや「道徳的」なものは何もない。ここで言及された対照は単に，（衝動と習慣の現存する機構ゆえ）最初に現れた欲望の対象と，最初に現れた衝動の見直しとして，その衝動が実際の成果を決定しうる諸条件に照らして批判的に判断された後に創発する欲望の対象との対照なのである。「望まれうる」もの，つまり欲望される（価値づけられる）べき対象は，ア・プリオリな空中から舞い降りてくるものでもなければ，命令として道徳のシナイ山から降臨してくるものでもない。それは，過去の経験が，批判されない欲望に基づく早まった行為は挫折につながり，多分に悲劇に終わるということを示しているがゆえに，明示されるのである。「望まれる」ものと区別された「望まれうる」ものは，したがって何か一般的なものやア・プリオリなものを指示しない。それは，未検討の衝動の作用および結果と，条件と結果の探査の産物である欲望と関心の作用および結果の相違を示すのである。社会的な条件や圧力は，欲望の実行に影響する条件の一部である。したがって，それは利用可能な手段の観点で目的を立てる際に考慮されなければならない。しかし，偶然生じる欲望の対象という意味での「である」と現実的な諸条件に関して作られた欲望の「であるべき」との区別は，いずれにせよ，人間が成熟して，衝動が生ずるごとにそれに「身を任せる」幼稚な性向と縁を切るときには，持ち出さざるをえない区別である。

欲望と関心は，既に見たように，それ自身成果の偶発的条件である。そのようなものとしてそれらは潜在的な手段であり，またそのようなものとして値踏みされなければならない。この言明は，既に述べた点を再述したにすぎない。しかし，言明する価値がある。なぜなら，価値づけの理論的見解のあるものが実際の常識的態度や考え方からいかに遠く離れているかを強烈に指示するからである。欲望と関心をそれらが最初に現れた際に終局的なものとして扱うのではなく，それらを手段として扱う――すなわち，実際にどういう結果を生む傾向にあるかということに基づいてそれらを値踏みし，対象あるいは目論見を形成する――必要性を事実上説いている無数の箴言がある。「転ばぬ先の杖」「せいては事を仕損じる」「今日の一針，明日の十針」「怒ったときには十数えよ」「見通しがつくまでは仕事にかかるな」――などは多くの格言のごく一部にすぎない。それらは「**終わりを考えよ**（*Respice finem*）」という古諺――**どんな**欲望でも間に合う目論見を単に**所持すること**

と，実際に生ずる結果が，それが生じたときに実際に貴ばれ評価されるようなものであることを確かめるべく**注視し**検討することとの相違に注目した諺――に要約される。先入見をもつ理論（大方，無批判的に受け入れられた「主観主義的」心理学の結論によって甚大に毒されたもの）の急場の要求のみが，「好み」ならびに「尊重」の内容と欲望ならびに関心の内容との間に，それらが手段として考えられるとき，それぞれの原因を表す能力においてそれらを評価することによって作られる具体的な相違を無視するであろう。

【続く】